



Title	平賀源内の研究 大坂篇 : 源内と上方学界
Author(s)	福田, 安典
Citation	大阪大学, 2013, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/26230
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

論文内容の要旨

〔 題 名 〕

平賀源内の研究 大坂篇

学位申請者 福田安典

本書は平賀源内を扱ったものである。

平賀源内はエレキテルの復元が夙に知られており、江戸期の人物の中では比較的有名な人物である。本業は本草学であって、江戸湯島における薬品会の開催、その成果たる『物類品隘』（宝暦十三年）についても早くから一定の評価がなされている。また、風来山人の名で記した『風流志道軒伝』（宝暦十三年）、『根南志具佐』（宝暦十三年）などは江戸小説の先駆けとして評価され、福内鬼外の名で著した『神霊矢口渡』（明和七年）などの浄瑠璃作品は江戸浄瑠璃の代表として今も上演され、『風来六部集』に所載される戯作は後代に影響を与えたことから、日本近世文学史上でもある位置づけがなされている。

当然ながら、平賀源内の研究は早くより研究がすすめられ、城福勇氏の『平賀源内』『平賀源内の研究』を代表として多くの先学による成果が蓄積されている。

しかしながら、これら先学の研究によっても平賀源内の全容や文学史上の位置づけが正しく定まっているとは言えないのが現状である。その理由は複数が考えられるが、その最たるものは、これらの先行研究が意識的であるかどうかは不明ながら、江戸（東京）の源内を念頭に置いているからであろう。確かに、如上の源内の活動は江戸の地においてのものである。しかし、源内が江戸に出たのは二十九歳頃だと指摘されており、彼の生涯（享年五十二）の半分以上は讃岐と大坂で過ごしたことになる。その学問形成にはまず上方の学風や学界との交渉と影響が考えられねばならないはずである。にも関わらず、江戸の地における源内の姿を追い続けたところに従来の研究上の盲点がある。

本書は、その上方学界と源内との関係について、資料整理を中心に論じたものである。例えば、平賀姓の初出の『四日桃』の写真など、個人蔵を含めて恐らくは本書が初めて紹介するものもあり、その点でも従来の平賀源内研究とは一線を画するものである。

本書は以下の構成を取る。

I 風来山人の誕生

- 第一章 平賀源内の誕生
- 第二章 宝暦三年の平賀源内—白石から平賀、そして離郷—
- 第三章 『有馬記行』の世界—出郷前後—
- 第四章 平賀源内 江戸へ出る
- 第五章 風来山人の誕生—書肆との問題—

II 戸田旭山という師匠

- 第一章 戸田旭山
- 第二章 香川修庵という医師

III 源内の文芸風景

- 第一章 『本草妓要』論—香川修庵と上方戯作—
- 第二章 平賀源内『天狗憫懣鑑定縁起』論—本草学と戯作—
- 第三章 都賀庭鐘『通俗医王耆婆伝』について—医師の描く戯作—

第四章 平賀源内と『名物六帖』

IV おわりに一平賀源内とその時代一

「I 風来山人の誕生」では、平賀源内には源内以外に、幼名四方吉、名は国倫、号は鳩溪という呼び方があり、たとえば学問上では鳩溪、文芸作品では風来山人という使い分けがある。本章では、白石四方吉から平賀源内、そして風来山人へと名乗るまでの彼の軌跡をたどることとする。

平賀源内という名は生まれながらに付けられた名前ではない。平賀源内が高松藩志度浦蔵の蔵番という父の家督を襲う際に、自らの意志で「白石」から「平賀」へと改めたのである。その理由を彼の野望の現れとする短絡的な論は少なくないが、まず原資料である『平賀氏由来之事』の検証を通して、源内の本貫が奥州の白石一族であること、改姓の理由をそこから探るといふ試論を提示している。

ついで、伝記上の空白期である宝暦三年について論じる。この年は、伝説的に語られる源内の第一回目の長崎行きがあったとされるが、現存資料としては椎本俳人として活動していたものしか残されていない。その検討の前には、まず讃岐に於ける大坂俳諧の影響を明らかにする必要がある。その検討を通して、源内が出郷に際して残した『有馬記行』の分析、江戸への進出の経緯を説明する。この江戸進出の経緯の説明に用いた資料は、従来の研究では使用されていない、源内の薬品会の新資料である。そして、江戸での源内の出版状況について諸説を整理してみた。従来は、須原屋市兵衛という進取に富んだ江戸の書肆が源内の著書を世に送り出したとの説がある。しかし、仔細に見れば、源内の小説の出版元は源内の江戸宅貸し主であり、『物類品鑑』の出資者は、俗に源内に処分を下したと説かれる高松藩主・松平頼恭の可能性が極めて高いことを指摘した。すなわち、江戸の源内誕生は、高松藩主の援助無しには生まれることはなかったと思われる。

「II 戸田旭山という師匠」は、源内が大坂での修業時代に師として仰いだ戸田旭山という医師についての論考である。この旭山という医師の全容については、断片的に語られるに過ぎず、正面切った論はないようである。そこで、まず、旭山の伝記について整理し、源内との出会いについて考察した。旭山という医師は当時の大坂にあっては存在感のある医師であって、その周辺には木村兼葭堂、坂上峰房、伊丹椿園、都賀庭鐘、柳里恭などもいて、華やかな学問風景のあることが明らかになり、同時に畸人としての旭山の行状も把握できるようになった。旭山主催の薬品会は宝暦十一年以来、数度に及び、源内が江戸で開発した火流布やスランガステインを出品している。源内と大坂とをつなぐ鍵となる人物である。

この旭山が一方的に論敵にしていたのが、京都堀川の香川修庵という医師であった。そのため、源内もことあるごとにこの修庵への批判を繰り返し、それがいつしか戯作を生む契機となっていくのである。

「III 源内の文芸風景」は、前章までの指摘を受けて、実際に源内の文芸を読み解こうと試みたものである。まず、宝暦期の京都で『本草妓要』という遊女を扱った洒落本を俎上にあげた。この作品については清代の医学書『本草備要』の逐語的もじりであることが従来指摘されてきたが、その実、香川修庵の著書『一本堂薬選』『一本堂行余医言』の逐語的もじりであることを指摘した。当時の上方戯作は、香川修庵の医学書に親しむ者が作者と読者にいたことの明徴である。当然、その読者に平賀源内がいたと考えられる。平賀源内には『天狗髑髏鑑定縁起』という作品があって、その執筆意図が修庵批判であったことは、源内自身が跋文で明言しているからである。

その『天狗髑髏鑑定縁起』は、門人が芝の愛宕で異物を拾い、世間ではみんな「天狗の髑髏」と騒ぐが、源内先生に鑑定を乞うという筋立てで、驚く門人を尻目に天狗の髑髏だと目利きするという作品である。この作品の背景には、当時のいくつかの事件がある。一は、荻生徂徠が『天狗説』を著したが、その徂徠を嫌っていたはずの京古義堂の伊藤東涯が、この『天狗説』を誉めたという珍事である。この一件は、たちまちに全国に拡がり、諸所に書き残されるほどである。源内がこの一事を知っていたかどうかについて、懐徳堂や谷川士清、荒木田尚賢などの証言を集めて推測した。そして、実際にこの作品は『天狗説』を下敷きに作られているようである。

もう一は、この時期の源内の発見に「竜骨」「スランガステイン」がある。源内にとってのこの発見は、上方の固陋な学界に対する新説提示でもあった。源内はこの自身の発見をこの作品に取り

込んでいるのである。

そこに古義堂と関係の深い香川修庵批判を含むこと、まさにこの「江戸戯作」は上方戯作のよう
でさえある。上方、特に大坂の学界を知らなければその本質を読み解くことができないのである。

一方、香川修庵には高弟・都賀庭鐘がいた。庭鐘は孤高な文人で、平賀源内と並び論じられるこ
とはなかった。ところが、この伝記の少ない寡黙な庭鐘は、こと修庵がらみではたびたびその姿を現
してくれる。庭鐘の『通俗医王者婆伝』という読本は、医師としての庭鐘の主張が見られるが、そこ
にも旭山の薬品会を取り入れている。そして、『義経磐石伝』では火浣布とともに自身が紹介した新
羅人参も記し、明らかに源内を意識していることを指摘した。庭鐘は、大坂で開催された旭山の薬品
会で、源内が出品した火浣布を実見した可能性が高いのである。

また、平賀源内の特徴として、伊藤東涯の『名物六帖』を用いることが中村幸彦氏によって指摘さ
れている。その利用状況を源内の全作品において検証したところ、確かに源内は『名物六帖』を頻繁
に利用していると断じてよさそうである。そのことは、源内が終生こだわったのが上方学界の本草学
(名物学)であり、古義堂を中心とした学問であったことを如実に示している。

「IV おわりに一平賀源内とその時代一」では、まず都賀庭鐘の『英草紙』（寛延二年）から筆を
起こし、源内の生きた時代を概観することで、源内の姿を描写した。

『英草紙』は、読本の開祖としての高い評価が与えられている。しかし、その評価はおもに中国白
話小説の享受に偏っている点は否めない。仔細に作品を分析すれば、その冒頭話は『夫木和歌抄抜書』
の知識無しには理解できないものである。読者として白話小説と俳諧・和歌の両面に通じる人間が期
待されているのである。その想定される読者の中に戸田旭山がいたと思われる。同時に源内も視野に
収めないといけない。

庭鐘と源内とは因縁浅からぬ関係である。その「因」は両者が選んだ師から起こり、同時代に医学
・本草学・戯作という同じ土俵に立つという奇しき「縁」に両者は翻弄されることとなる。庭鐘が師
として選んだのは京都堀川の儒医香川修庵、かたや源内が師として選んだのは大坂の奇人戸田旭山で
あった。修庵と旭山はあまりにも対照的すぎる。その関係はそのまま源内と庭鐘にもあてはまる。

両者は、明清小説、明清笑話、古義学、古文辞学、陽明学、投壺などの中国趣味などの共通の志向
がある。二者をもってこの時代の文人を代表させてもよいほどである。しかし、両者は似た志向を勇
士ながらも本質的に何かが違う。その違いを、従来のように上方と江戸との「違い」に求めることは
過ちであろう。それはやはり両者の志向の違いであろう。そして両者の類似こそが、源内が庭鐘と同
様の学問風景の中にいたことの証であろう。

上方学界と絡めた新たな源内論が待たれていると思われる。

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 (福田 安典)	
	(職) 氏 名
論文審査担当者	主 査 教授 飯倉 洋一 副 査 教授 加藤 洋介 副 査 講師 合山林太郎
論文審査の結果の要旨	
以下、本文別紙	

論文内容の要旨及び論文審査の結果の要旨

学位申請論文題目：平賀源内の研究 大坂篇

学位申請者：福田 安典

論文審査委員

主査 文学研究科教授 飯倉 洋一

副査 文学研究科教授 加藤 洋介

副査 文学研究科講師 合山林太郎

論文内容の要旨

本論文は、2013年1月30日に刊行された研究書『平賀源内の研究 大坂篇』（ペリカン社刊）を学位申請論文として提出したもので、A5判312頁(索引6頁を含む)におよぶ。

エレキテルの復元で知られる平賀源内は、本草学者としても評価され、風来山人の戯名で著した『風流志道軒伝』『根南志具佐』は江戸小説の先駆けとして、福内鬼外の名で著した浄瑠璃『神靈矢口渡』は江戸浄瑠璃の代表として、日本近世文学史に一定の位置づけがなされている。当然、平賀源内の研究は、城福勇『平賀源内の研究』を代表として多くの成果が蓄積されている。しかしこれらは江戸での源内の事績が中心であり、源内が学問形成を果たした大坂との関わりについては研究が手薄だった。

本書は、その大坂学芸界と源内との関係を軸に、源内の伝記に関する新しい指摘や解釈を提示するとともに、本草学の師匠の戸田旭山との関わり、源内の文芸作品の学問的な背景などを、新出資料を含む多くの文献を駆使して論じたものである。

第I部「風来山人の誕生」では、伝記根本資料「平賀氏由来之事」を再検討し、「李山」の号で行っていた俳諧活動を明らかにし、大坂との関わりを示す『有馬記行』について詳細に分析し、新資料『鳩溪薬品会目録』という写本によって物産会を開催する源内の実像を紹介し、源内をプロデュースした版元との関わりについても詳述し、総体として従来の「山師平賀源内」のイメージに修正を迫る。第II部「戸田旭山という師匠」では、源内の学識・思想の土壌が、大坂を中心として上方学界にあり、とくに本草学の師匠戸田旭山の存在が重要であることを説く。また源内が批判した香川修庵について詳述し、源内における本草学と文芸との関わりについて見通しを示す。第III部「平賀源内の文芸風景」では、香川修庵の著述『菑選』を踏まえて書かれた『本草妓要』という洒落本を取り上げ、源内がこの戯作に強い関心を持っていたことを確認する。また『天狗觸髅鑑定縁起』という源内の著作が、戸田旭山の『文会録』を踏まえていることを実証し、あわせて修庵の門人で小説家である都賀庭鐘の戯作がやはり『文会録』を踏まえていることを指摘し、源内との方法的な共通点を見出だす。さらに源

内が伊藤東涯の『名物六帖』を多用する戯作者であったことを示す。第IV部「おわりに」では、都賀庭鐘『英草紙』の出典考証などを補助線として、源内が上方学芸界に横溢した中国明清の文化摂取の空気の中で文芸意識を育てたことが説かれる。総じて、従来の江戸で活躍したという源内像を、上方学界との関わりで捉えることで相対化し、本草学を基盤とした文人としての源内像を新たに提起した論文である。

論文審査の結果の要旨

従来の平賀源内研究は、源内の江戸在住時代の事績についての研究に偏っており、江戸に出る前の大坂での学問形成については言及されることが少なかった。そのために源内の全体像が見えにくかったが、本論文は源内の大坂での本草学を中心とする学問や文芸意識の形成に焦点を当て、新しい資料をも駆使して、源内の人的交流や書物交流を縦横に論じ、従来にない平賀源内像を提示することに成功している。これは福田氏が大坂の学芸全般に詳しく、かつ大坂文芸史という大きな構想を持っていることによるところが大きい。

第I部では「平賀氏由来之事」を再検討し、先祖の可能性のある白石十郎左衛門が金山開発に関わったということを発掘して、白石の仕えた伊達侯とライバルだった佐竹侯の金山開発に手を染めたという興味深い仮説を提示する。また源内と書肆版元との関係は、源内の著述家としての出発を支えた書肆が生活人としての源内に関わる人々であるということを読得力のある考証で明らかにしている。第II部では戸田旭山の人間性を、源内との関わりを通してよく描いている。第III部の第一章～第三章で取り上げられた『本草妓要』・『天狗觸體鑑定録起』・『通俗医王耆婆伝』についての論は、今後必読の論となることは間違いないが、さらに人的交流と書物交流において各論が連携していて、重厚であり、読み応えがある。第IV部は、源内における明清文化の影響を、都賀庭鐘を補助線として考えたもので、新たな源内像構築の構想を可能にしている。

一方で、本論文が体系性という点においてやや弱いことは否めない。序論や全体のまとめがなく、源内の全体像が見通してとしてわかりやすく示されていない。源内というよりも源内の周辺からの切り口の論が多いことも、源内の全体像を見えにくくしている。また、引用資料の解釈に疑問のある箇所がいくつかあり、ところどころ、表現に粗さがみられることは惜しまれる。

とはいえ、本論文は従来知られていない新資料を多く用いて新見に満ち、各論が連携しつつ「源内と大坂」という新しいテーマに収斂しており、今後、源内論の基礎的文献となるのは確実である。源内研究を大きく前進させた本論文の意義は高く評価できるものであり、博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。